

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	田中 穂乃香 (たなか ほのか)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科修士課程 2 年
発表年月 または事業開催年月	2022 年 8 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本学校心理学会第 24 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	田中穂乃香・桂川泰典
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	養育と愛着がメンタライジングに及ぼす影響プロセスの検討 —大学生とオンラインデータによる多母集団同時分析—
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p><b>&lt;問題と目的&gt;</b></p> <p>メンタライジングとは、自分と他者の行動の背後にある心理状態(考え、感情、欲求など)に注意を向け、それを認識することである (Allen, 2013 上地・神谷訳 2017)。メンタライジングは親との愛着を基盤として発達するが、不適切な養育は不安定な愛着をもたらし、メンタライジングの発達を妨げる。本研究では、虐待や過保護などの不適切な養育を含む親の養育態度が、子どもの愛着を介してメンタライジングに影響を及ぼすプロセスを検討する。</p> <p><b>&lt;方法&gt;</b></p> <p><b>調査対象:</b> 大学生 190 名(18~25 歳, 平均年齢 20.85 歳, <math>SD = 1.62</math>, 女性 125 名, 男性 65 名), セルフ型アンケートツールを用いて回答を得た有効回答者 135 名(21~59 歳, 平均年齢 46.97 歳, <math>SD = 8.78</math>, 女性 57 名, 男性 78 名)(以下, オンラインデータとする。), 計 325 名を分析対象とした(平均年齢 31.70 歳, <math>SD = 14.11</math>, 女性 182 名, 男性 143 名)</p> <p><b>調査材料:</b> (a)日本語版虐待的養育環境尺度(Child Abuse and Trauma Scale: Sanders &amp; Giolas, 1991; Sanders &amp; Becker-Lausen, 1995 田辺訳 1996, 2005)(以下, CATS)「性的虐待」因子を除いて回答を求め, 合計得点を分析に用いた。(b)日本語版養育態度尺度(Parental Bonding Instrument: Parker, G., Tupling, H., &amp; Brown, L. B, 1979 小林訳 1991)「養護」「過保護」の 2 因子。(c)一般他者版成人愛着スタイル尺度(中尾・加藤, 2004)「見捨てられ不安」「親密性の回避」の 2 因子。(d)日本語版メンタライゼーション尺度(The Mentalization Scale: Dimitrijević, Hanak, Dimitrijević, &amp; Marjanović, 2018 松葉他 訳 2019)「他者に対するメンタライジング(以下, 他者 M)」「自己に対するメンタライジング(以下, 自己 M)」「メンタライゼーションへの関心(以下, 関心 M)」の 3 因子。</p> <p><b>倫理的配慮:</b> 早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」の審査・承認を得て実施された(承認番号:2020-111)。</p> <p><b>&lt;結果と考察&gt;</b></p> <p>養育が愛着を介してメンタライジングに及ぼす影響, および養育が直接メンタライジングに及ぼす影響を検討するにあたり, 大学生とオンラインデータにおいて多母集団同時パス解析を実施した(Figure 1)。モデルの適合度は <math>GFI = .972</math>, <math>AGFI = .915</math>, <math>CFI = .982</math>, <math>RMSEA = .044</math> であり, 適合は良</p>	

好であった。母集団間のパス係数の差の検討を行ったところ、5つのパスにおいて1%水準で有意な差が認められた。両母集団において、虐待と過保護は見捨てられ不安に正の影響を及ぼし、さらに見捨てられ不安を介して自己Mに負の影響を及ぼすこと、親密性の回避は他者Mに負の影響を及ぼすことが示された。この結果は、見捨てられ不安は自己観に、親密性の回避は他者観に対応している(中尾・加藤, 2004)ことから、メンタライジングについても同様であるといえる。また、養育と愛着から関心Mへのパスは、全て大学生の方が影響が大きかった。このことから、オンラインデータは平均年齢が高く、自己の価値観が固定化されており、養育や愛着の影響が減じていると考えられる。3つのメンタライジングの影響性から、低下しているメンタライジングを高める介入を行う際には、メンタライジングの発達プロセスを考慮する必要があるといえる。

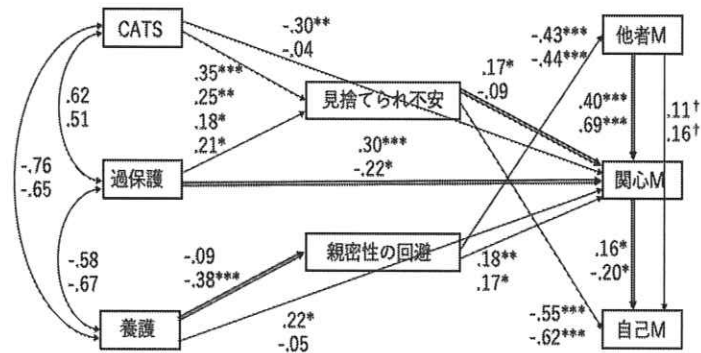


Figure1 多母集団同時パス解析の結果

上：大学生 下：オンラインデータ

誤差変数は省略した。⇒は母集団間で差が有意であったパスを示す。

※無断転載禁止